

日本の美術館建築の概況と小規模化等の新たな傾向に関する研究

中尾 恭輔・井上 順稀・平山 文則^{*}

岡山理科大学大学院工学研究科修士課程建築学専攻

^{*} 岡山理科大学工学部建築学科

(2022年10月31日受付、2022年12月5日受理)

1. 研究の背景と目的

1-1 研究の背景

我が国の美術館は国内に920館程度^{注1)}存在すると言われている。古くは有力寺社や企業が所有する貴重品を公開したことに始まり、その後公共美術館については国や県が、更に大都市を中心に建設され90年代にピークを迎え、その後は減少傾向にある。

ピークを迎えた後の新たな動きは、大きく2つあると想定している。一つは、街づくりや地域おこしの観点も加味して、従来は美術館を有していなかった小規模自治体や民間、等において展示分野を限定した小規模化、もう一つは、古い時期に建設された公立美術館の機能の陳腐化等にもなう建替えである。

これらの動きは現在進行中であることから、全国状況が把握されておらず、その報告は少ない。

1-2 研究の目的

本研究の目的は、博物館の一類型である美術館建築の我が国における概況(時期、規模、展示種別、設立主体、等)を統計的に把握することである。

また上記の把握を前提に、新しい傾向と思われる、分野を限定した小規模化と大規模公立美術館建替えの方向性を明らかにする。

1-3 研究方法

研究対象は、「全国博物館総覧」の種別が「美術」で、面積データの記載がある693館^{注2)}とする。

分析指標は、館名^{注3)}/設立年^{注4)}/延べ面積/展示品種別/設立主体/地域の6データとする。いずれも「全国博物館総覧」からデータ入手する。

1-4 既往研究

神部・奥平ら^{参1)}や笠井・奥平ら^{参2)}や内田・奥平^{参3)}は私立・市立・県立美術館の規模と平面計画の概況を報告し

神保・大月^{参4)}は地域分布、施設名称に着目し、その経年変化を分析した。

小池・中川^{参5)}は我が国の美術館建築の創設期から今日まで、地域における主要文化施設として普及する変遷、時代に応じた空間の変化を明らかにした。

桂^{参6)}は都道府県立美術館の規模及び機能面積比率の分析を行った。

平野・岡田ら^{参7)}は博物館・美術館がどの程度の人口規模の都市に成立し、人口規模と施設数や施設規模の関係を全国の市町村単位で分析した。

このように、我が国の美術館を対象にした報告は多いが、設立主体や機能を限定した分析が主体であり、全ての美術館を対象にしたものではない。

2. 美術館建築の概況

我が国における美術館建築の概況を6指標に分けて以下に示す。

2-1 美術館の館名

館名は以下の4つに区分できる。

タイプA:設立主体+美術館

タイプB:設立主体+特定地域又は展示種別+美術館

タイプC:設立主体+特定展示種別及び人名+美術館

タイプD:美術館以外の呼称(カタカナ、英語表記含む)

4区分の年代ごとの比率を図1に示すと以下の知見が得られる。

30年代以前は、美術館という呼称が定着しておらず^{注3)}、過半が「美術館」以外の呼称である。「美術館」という呼称ではタイプAが多い。

40年代から80年代にかけてタイプAが過半を占める。但し時代が降るにつれてタイプB及びCの比率が増える。

90年代以降は、タイプCの比率が増えタイプAを上回る。特に00年代以降は特定種別や特定の人名を冠した美術館が最も多い。

館名分析から、我が国の美術館は、初期段階は展示分野や地域を問わずに総合的な館が設けられ、その後

展示分野や地域を限定した館が設けられ、特に90年代以降は分野、地域、人名等を限定した館が最も多くなっている。

2-2 美術館の設立年

美術館の設立年を図2に示す。50年代以前は1~2館/年、50年代から3~5館/年、70年代~80年代に10~20館/年に増加し、1994年に42館/年でピークを迎え、2000年以降減少し、2008年以降は10館未満/年に激減している。我が国における美術館整備が90年代に一旦は完了した状況がわかる。

なお、設立年ごとの床面積を図3に示す。設立館数と多少様相が変わり、初期段階に大規模館が建設された状況がわかる。

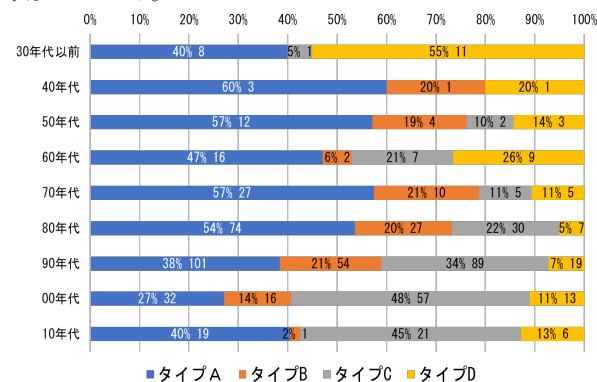


図1 設立年ごとの館名比率 N=693

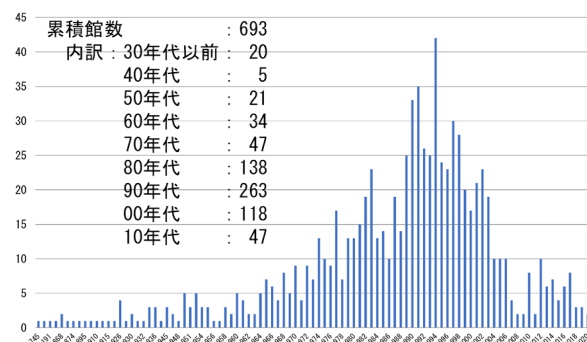


図2 設立年数 N=693

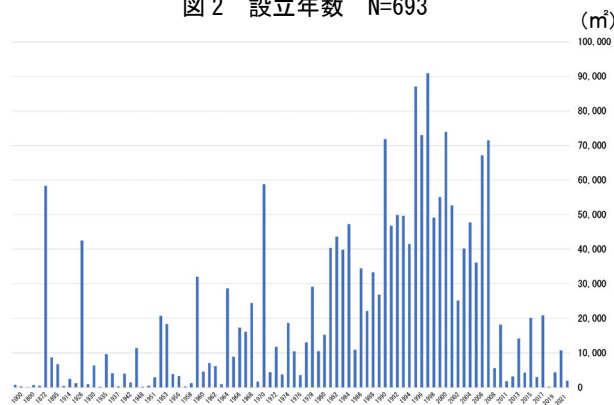


図3 設立年ごとの床面積 N=693

2-3 美術館の規模

2-3-1 規模比率

規模を5区分（超大規模：1万㎡以上、大規模：3千~1万㎡、中規模：千~3千㎡、小規模：5百~千㎡、極小規模：5百㎡未満）で示したものを図4に示す。中規模が34%で最も多く、次いで極小24%、小規模20%であり、中~小規模の比率が高い。

設立年と規模の関係を図5に示す。1万㎡以上の超大規模館は40年代から80年代まで減少するが、その後増加に転じている。これは、県立クラスの大規模館の建設が一旦は完了するが、その後老朽建替え事例が出始めていると想定される。3千~1万㎡の大規模館は増減を繰り返しながら漸減傾向である。千~3千㎡の中規模館の比率は変わらず、千㎡未満、5百㎡未満の小規模館の比率は時代が降るにつれて増えている。

我が国の美術館の規模は、時代が降るにつれて超大規模は微増、大規模は微減、中規模は変化なく、小規模は増加傾向にある。

2-3-2 平均延床面積

本稿で対象とする全国の美術館数は693館で、累積延べ床面積は約190万㎡であり、平均延べ床面積は2,800㎡程度である。設立年と平均延床面積の関係を表1に示す。30年代以前が6千㎡代で規模が大きく、時代が降るにつれて増減を繰り返しながら2千㎡前後まで規模が小さくなり小規模化している状況がわかる。

この状況を館名、設立主体、展示種別の3指標で詳しく分析したものを表2~表4に示す。

館名分析からの知見を以下に示す。タイプA（3タイプの中で規模が一番大きい）は、30年代以前は1万㎡を超える平均延べ床面積で規模が大きいが、時代が降るにつれて増減を繰り返しながら3千㎡前後まで規模が小さくなっている。タイプB（3タイプの中で2番目の規模）は40年代から60年代まで、1万㎡前後の平均延べ床面積で規模が大きいが、時代が降るにつれて規模は3千㎡前後まで下がる。タイプC（3タイプの中で一番規模が小さい）は設立年代に関わらず千㎡前後の小規模で、他の2タイプと明らかに異なる。特定分野に関わる美術館は時代が降るにつれて増加しており、その規模は千㎡前後の規模で一定であることから、美術館全体の小規模化につながっている。

設立主体分析からの知見を以下に示す。国立は、事例数が少なく、宮内庁の附属美術館を除くといずれも1万㎡を超える規模である。県立は、40年代と80年代を除くと、どの設立年代においても1万㎡前後で規模に著しい差はない。市立は50年代と70年代で4千㎡代であるが他の年代では2千㎡前後で小規模である。同様に、町・村立はどの年代においても千㎡前後で小規模であ

る。私立はどの設立年代においても概ね千㎡代であり規模の変化は少ない。我が国の美術館の規模は全体的に小規模化しているのではなく、小規模な市立及び町・村立の美術館の増加に伴い統計的には小規模化していることがわかる。

展示種別分析からの知見を以下に示す。

総合は、その呼称が示すように、どの年代においても概ね6千～1万㎡超の大規模である。一方、絵画、彫刻、工芸品、その他の4展示種別の館は、どの年代においても数百㎡～2千㎡程度の小規模である。

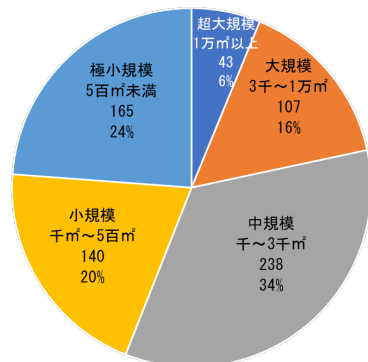


図4 規模比率 N=693

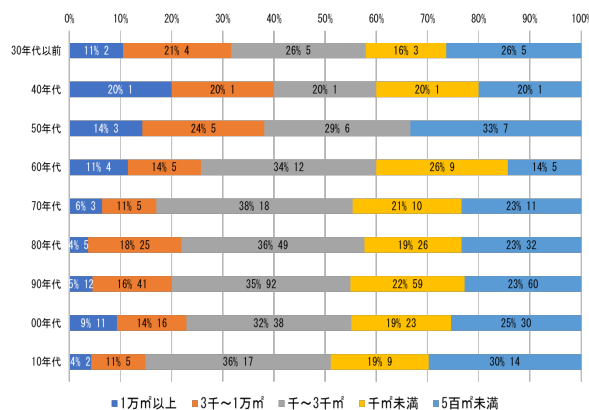


図5 設立年と規模 N=693

表1 設立年と平均延床面積 N=693

	延床の平均(㎡/数)	
30年代以前	6,727	20
40年代	3,434	5
50年代	4,155	21
60年代	3,645	34
70年代	2,784	47
80年代	2,255	138
90年代	2,412	263
00年代	3,417	118
10年代	1,915	47
全年代平均/計	2,788	693

表2 館名と平均延床面積 N=693

	タイプA (㎡/数)		タイプB (㎡/数)		タイプC (㎡/数)		タイプD (㎡/数)	
30年代以前	15,070	8	0	0	385	1	1,236	11
40年代	1,924	3	10,507	1	0	0	888	1
50年代	2,639	12	13,891	4	1,541	2	2,777	3
60年代	4,975	16	9,983	2	1,318	7	814	9
70年代	2,678	27	5,261	10	715	5	474	5
80年代	2,907	74	2,198	27	948	30	1,180	7
90年代	2,838	101	3,341	54	1,559	89	1,492	19
00年代	5,427	32	3,076	16	2,608	7	2,432	13
10年代	2,839	19	293	1	980	21	1,398	6
平均/計	3,582	292	3,690	115	1,663	162	1,474	74

表3 設立主体と平均延床面積 N=693

	国立		県立		市立		町立		村立		私立	
30年代以前	32,566	2	37,748	1	733	2	0	0	0	0	2,013	15
40年代	0	0	5,698	2	0	0	0	0	0	0	1,924	3
50年代	13,824	3	9,701	2	4,201	2	0	0	172	1	1,370	13
60年代	9,983	1	13,971	5	1,104	7	0	0	0	0	1,732	21
70年代	0	0	8,331	6	4,468	9	2,028	1	0	0	1,246	31
80年代	0	0	5,288	19	2,660	47	607	6	1,155	2	1,246	64
90年代	1,635	1	9,398	14	2,966	81	1,171	22	468	4	1,654	141
00年代	50,000	1	9,442	10	2,821	50	671	5	1,021	2	2,247	50
10年代	0	0	9,340	4	1,246	19	361	2	0	0	1,285	22
平均/計	21,027	8	8,765	63	2,708	217	986	36	710	9	1,618	360

表4 展示種別と平均延床面積 N=693

	総合		絵画		彫刻		工芸品		その他	
30年代以前	23,236	5	1,716	6	0	0	896	9	0	0
40年代	5,996	2	2,451	2	273	1	0	0	0	0
50年代	13,491	4	2,419	8	1,230	1	796	6	3,968	2
60年代	10,236	7	2,657	13	2,150	4	968	8	696	2
70年代	8,087	8	1,175	23	489	4	3,303	11	840	1
80年代	6,683	24	1,367	64	1,418	13	1,005	35	1,512	2
90年代	7,989	33	1,559	152	897	21	1,815	50	3,435	7
00年代	11,321	17	1,913	44	1,970	7	2,485	31	1,882	19
10年代	5,865	8	1,090	23	361	3	890	10	2,682	3
平均/計	9,154	108	1,582	335	1,188	54	1,679	160	2,250	36

2-4 美術館の展示品種別

主な展示品種別の割合を図6に示す。種別比率は、絵画が約半分、工芸品が約1/4で多い。総合16%、彫刻8%、写真漫画等その他5%である。

設立年と展示種別の関係を図7に示す。絵画が増加し、彫刻と工芸品が減少、総合が微増であることがわかる。

規模と展示種別の関係を図8に示す。「総合」は1万㎡以上の大規模館が約80%、3千~1万㎡の中規模館が約45%であり、規模が大きい事例が多い。一方「彫刻」や「工芸品」は規模が小さくなるにつれてその比率が上がり、「絵画」は3千㎡未満の館の半分程度を占める。

2-5 美術館の設立主体

設立主体の割合を図9に示す。設立主体は、私立が52%と最も多く、次いで市立32%、県立9%、町立5%であり、国立及び村立は1%と少ない。

設立年と設立主体の関係を図10に示す。国立は60年代までに建設され、それ以降は特徴的な館が数少なく建設されている。県立は80年代までに建設が一巡し、それ以降は老朽化建替え事例が増え、今後も継続すると想定される。一方、市立は古い時代は大都市のみに建設されていたが、年代が降るにつれ小規模自治体にも拡がり年々比率が増加している。私立は年代が降るにつれ比率が減少している。

展示種別と設立主体の関係を図11に示す。総合は大規模な公立（国立/県立/市立）比率が高く、私立比率が20%程度と低い。一方工芸品、絵画、彫刻は私立比率が60~40%程度と高い。小規模な公立（町立/村立）は、彫刻、その他、絵画を取扱っている。

2-6 美術館と地域の関係

全国を8地域に分けた割合を図12、8地域の単位人口当たり美術館数を図13に示す。

地域比率は関東22%、中部18%、甲信越13%、関西11%、北海道・東北13%、中国10%、九州8%、四国5%の順である。人口10万人当たりの比率では、甲信越、中国、四国は高く、関東は低い。美術館数は人口密度が高い地域が多いが、単位人口当たりでは逆に人口密度が低い地域（特に甲信越、四国）が高い傾向である。

設立年と地域分布の関係を図14に示す。初期段階は地域のばらつき（関東、関西多い）があるが、最盛期の90年代までに全国に普及している様子がわかる。90年代以降は九州、四国の比率が高い。

地域と展示種別の関係を図15に示す。関東と甲信越は「絵画」、北海道・東北は「彫刻」、中部と関西は「工芸品」、中国と九州は「総合」、四国は「彫刻」及び「その他」比率が高い。

地域と規模の関係を図16に示す。3千㎡以上を大規模

と定義すると、関東や九州は大規模が多く、四国や甲信越は小規模が多い。

3. 結論

3-1 我が国の美術館建築の概況

我が国の美術館建築の概況は概ね以下の内容である。

・美術館の開館年は、50年代以前は1~2館/年、50年代から3~5館/年、70年代~80年代に10~20館/年に急増し、1994年に42館/年でピークを迎え、2000年以降減少し、2008年以降は10館未満/年に激減し、美術館整備が90年代に一旦は完了した状況がわかる。

この傾向は地域分布において、初期段階は地域のばらつき（関東、関西多い）があったが、90年代までに全国的に平準化したことや、県立美術館が80年代までに建設が一巡したこと等の裏付けがある。

・主な展示品種別の割合は、絵画が約半分、工芸品が約1/4で多く、総合16%、彫刻8%、写真漫画等その他5%である。設立年と展示種別の関係は、時代が降るにつれて絵画は増加し、彫刻と工芸品が減少し、総合が微増である。

・設立主体は、私立が52%と最も多く、次いで市立32%、県立9%、町立5%であり、国立及び村立は1%と少ない。県立は80年代までに建設が一巡したが、それ以降も老朽化建替え等が継続すると想定される。一方、市立は古い時代は大規模自治体で設立されていたが、年代が降るにつれ小規模自治体にも拡がり年々比率が増加している。私立は年代が降るにつれ比率が減少している。

・美術館の地域分布は、当初人口密度が高い地域に多かったが90年代までに平準化され、現時点の単位人口当たり美術館数は、人口密度が低い地域（特に甲信越、四国）が高い傾向にある。

3-2 1990年代以降の新しい傾向

以上述べてきたように、我が国の美術館建築は90年代を境に状況が激変する。90年代までは、全国的な整備期と呼ぶことができ、県立美術館を中心とする総合大規模美術館が各地域に整備され美術品鑑賞環境が平準化された。一方、90年代以降の傾向は概ね以下の内容である。

・90年代以降の美術館規模は小規模化している。但し、超大規模美術館も微増（老朽化建替えによる）していることから2極化していると言っても良い。

・小規模化は全体的に小規模化しているのではなく、小規模な市立及び町・村立の美術館の増加に伴い統計的に小規模化している。

・展示分野、地域、人名等を限定した館は、時代が降ると過半を超え増加し、その規模は千㎡前後で一定であることから美術館全体の小規模化につながっている。

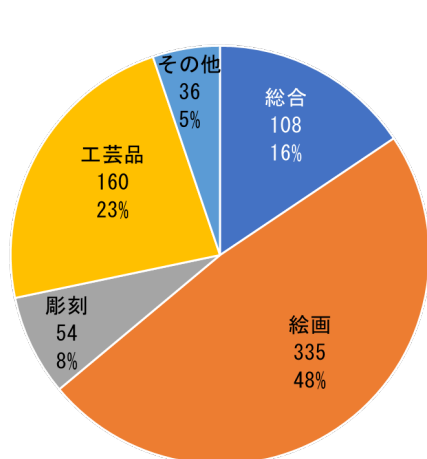


図6 種別比率 N=693

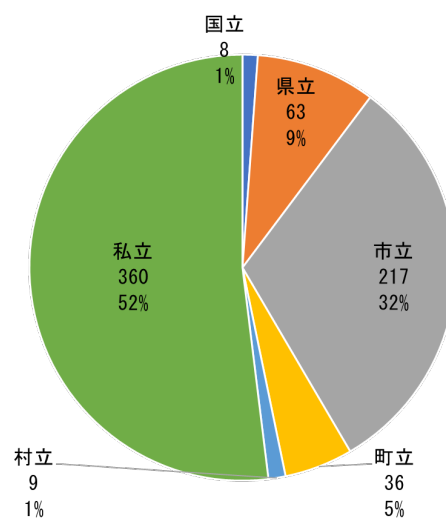


図9 設立主体比率 N=693

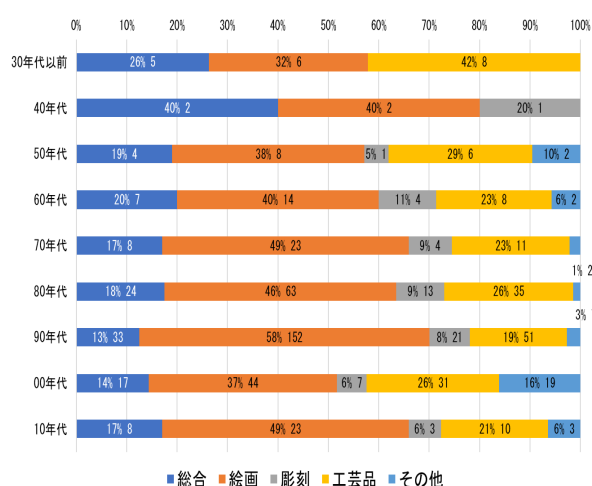


図7 設立年と展示種別 N=693

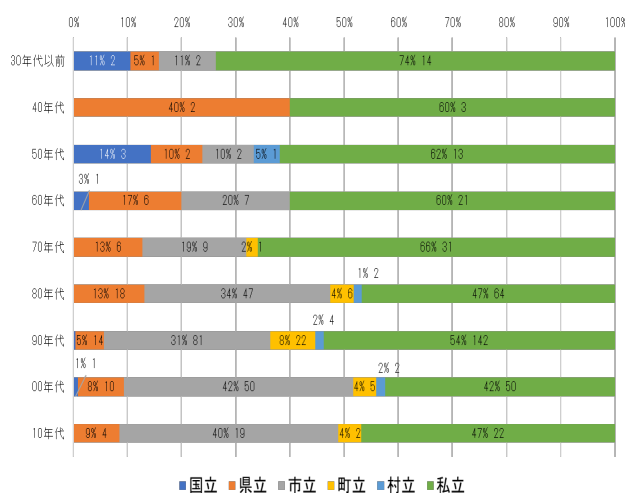


図10 設立年と設立主体 N=693

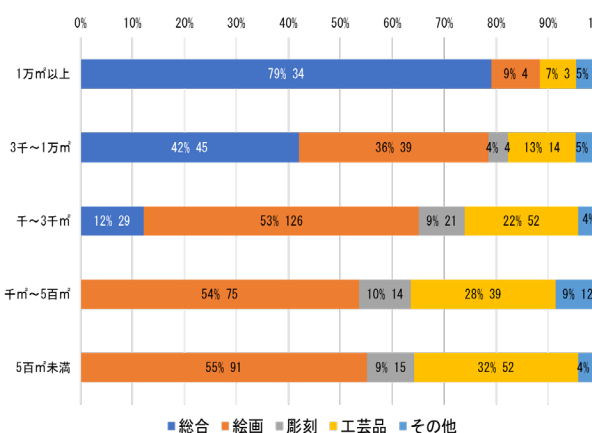


図8 規模と展示種別 N=693

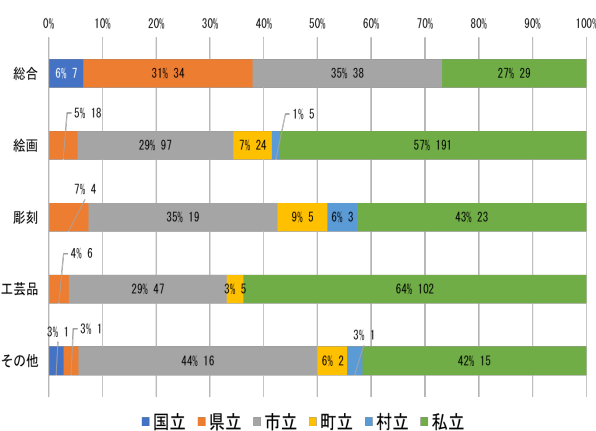


図11 展示種別と設立主体 N=693

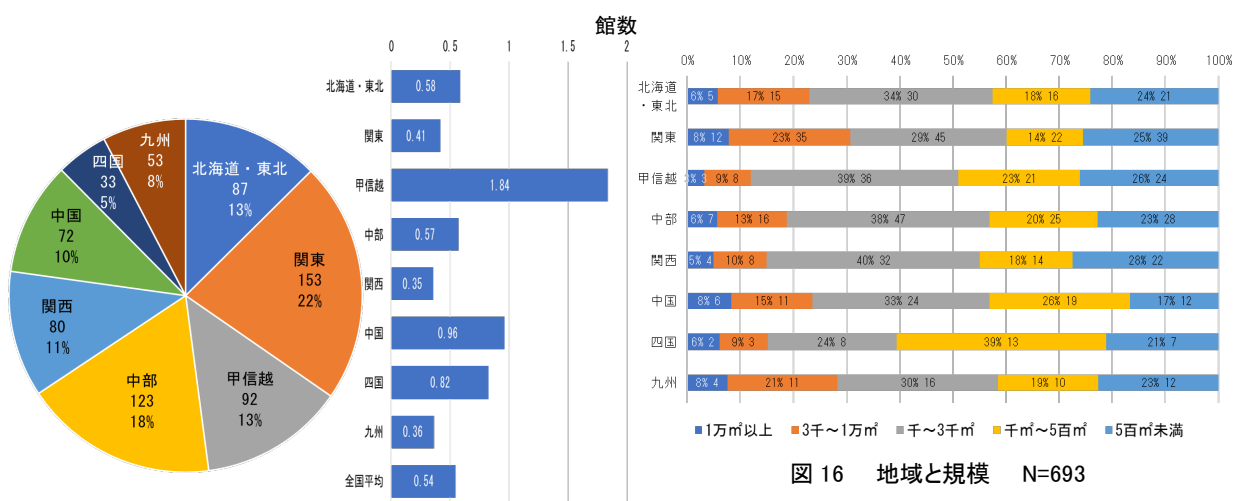


図 12 地域比率 N=693 図 13 単位人口当たり美術館数 注

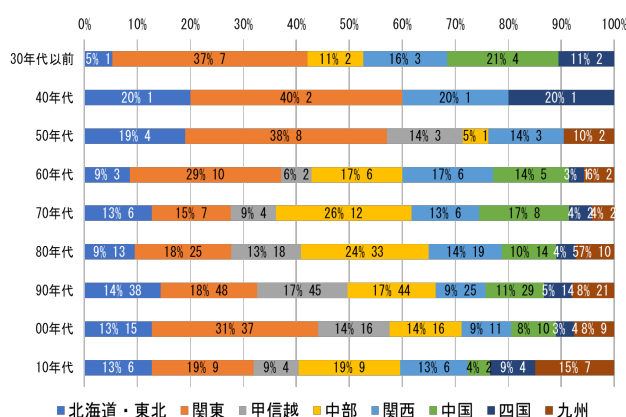


図 14 設立年と地域分布 N=693

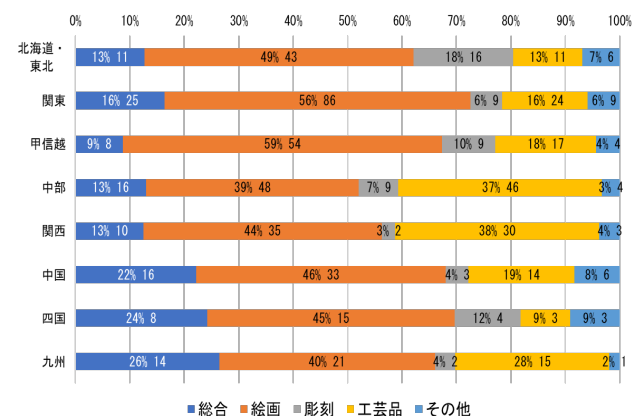


図 15 地域と展示種別 N=693

注1) 美術館の定義は「全国博物館総覧：著者 財団法人日本博物館協会 令和2年7月版」で展示種別「美術」に分類される館とし、公立私立併せて924館である。なお、種別は総合、郷土、美術、歴史、自然史、科学、動植物水族園の7区分である。

注2) 「博物館総覧」の924館のうち面積や概要等の詳細データがある693館を分析対象とした。

注3) 「美術館」という名称が定着したのは1920年代からで、それ以前は「博物館」、「宝物館」が主流。

注4) 古い時代に建設され建替えられた場合、同一敷地での建替えの竣工年は古いままとする。

参考文献

- 参1) 内田賢治, 奥平耕造: 県立美術館の規模と平面計画について 学術講演梗概集(関東), 1993, 07
- 参2) 笠井克全, 奥平耕造, 神部敦: 市立美術館の規模と平面計画について 日本建築学会大会学術講演梗概集(東海), 1994, 9
- 参3) 神部敦, 奥平耕造, 笠井克全: 私立美術館の規模と平面計画について 日本建築学会大会学術講演梗概集(東海), 1994, 9
- 参4) 神保智久, 大月淳: 国公立美術館の地方分布及び名称類型の経年変化 日本建築学会大会学術講演梗概集(東海), 2021, 9
- 参5) 小池志保子, 中川理: 空間構成からみた日本の公設美術館の変化について 日本建築学会 会計系論文集, 第76巻, 第659号, 221-227, 2011, 1
- 参6) 桂英昭: 美術館建築の平面計画に関する研究 日本建築学会九州支部研究報告, 第33号, 1992, 03
- 参7) 平野圭祐, 岡田光正, 柏原士郎, 吉村英祐, 横田隆司, 金漢洙: 博物館・美術館等の単位人口当たり施設数および施設規模について地域施設の供給計画に関する研究, 日本建築学会近畿支部研究報告, 1989, 09

A study on Overview of Museum Architecture in Japan and New Trends such as Smaller Scale

Kyousuke NAKAO, Arika INOUE and Fuminori HIRAYAMA*

*Graduate School of Engineering,
*Department of Architecture , Faculty of Engineering,
Okayama University of Science,
1-1 Ridai-cho, Kita-ku, Okayama 700-0005, Japan*

(Received October 31, 2022; accepted December 5, 2022)

The number of art museums in Japan is said to be around 920. The first museums were built in the old days when valuable artifacts owned by temples, shrines, and corporations were exhibited to the public, and later the number peaked in the 1990s when the national government, prefectures, and large cities began to build art museums. After the peak is reached, two major new movements are expected. One is the small-scale development of art museums in small municipalities and the private sector, which did not previously have art museums, from the perspective of urban development and regional revitalization, limiting the scope of their exhibitions. The other is the reconstruction of public art museums built in the past due to the obsolescence of their functions. Because these developments are ongoing, the national situation is not yet known and reported on.

The purpose of this study is to statistically grasp the general situation of art museum architecture in Japan (period, scale, exhibition type, founding body, etc.). Based on the above understanding, we will also identify the direction of the new trend toward smaller-scale, field-specific museums and the reconstruction of large-scale public art museums.

Keywords: art museum ; shift to smaller scale ; new trends in art museums.